

## 【事例報告】

## キタトリシラミバエの飼育

山内 健生<sup>1)\*</sup>, 小松 謙之<sup>2)</sup>, 仲村 昇<sup>3)</sup><sup>1)</sup> 兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県立人と自然の博物館 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目<sup>2)</sup> 株式会社シー・アイ・シー 〒111-0014 東京都台東区北上野1-10-14<sup>3)</sup> (財)山階鳥類研究所保全研究室(鳥類標識センター) 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115Rearing of *Ornithomya fringillina* (Diptera: Hippoboscidae)Takeo YAMAUCHI<sup>1)\*</sup>, Noriyuki KOMATSU<sup>2)</sup>, and Noboru NAKAMURA<sup>3)</sup><sup>1)</sup> Institute of Natural and Environmental Sciences, University of Hyogo / Museum of Nature and Human Activities, Hyogo, Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo, 669-1546 Japan<sup>2)</sup> Civil International Corporation, 1-10-14 Kitaueno, Taito-ku, Tokyo, 111-0032 Japan<sup>3)</sup> Yamashina Institute for Ornithology, 115 Konoyama, Abiko, Chiba, 270-1145 Japan**Key words:** キタトリシラミバエ (*Ornithomya fringillina*), ハエ目 (Diptera), シラミバエ類 (hippoboscid fly), 飼育 (rearing), 羽化 (emergence)

## はじめに

シラミバエ科(以下, シラミバエ類)は吸血寄生性のハエ類で, 成虫は雌雄とも鳥類あるいは哺乳類の体表に寄生する。

シラミバエ類は卵胎生で, 雌成虫は1個体の終齢幼虫を産み落とす。終齢幼虫には移動能力が無く, ただちに蛹化する (Corbet, 1956)。そのため, シラミバエ類の雌成虫を採集して生かしたまま小型容器などに入れておくと, しばしば終齢幼虫を産み落とすことがある。しかし, こうした終齢幼虫の飼育例は少ない (例えば, Corbet, 1956; Hill, 1963; 片岡, 1999)。我々は, キタトリシラミバエ *Ornithomya fringillina* Curtis の終齢幼虫を飼育し, 成虫を羽化させることができたので報告する。なお, 本論文で用いたシラミバエ類の和名と学名は, 茂木 (2014) に従った。

## 飼育事例

## 1) シラミバエ成虫の採集

2010年11月1日に, 新潟県新潟市北区新鼻に位置する福島潟でシラミバエ雌成虫(図1A)が採集された。採集個体は, カスミ網を用いた野鳥の標識調査中に, 鳥から離れた室内の壁面で発見されたもので, 宿主の鳥種は不明である。このシラミバエ1

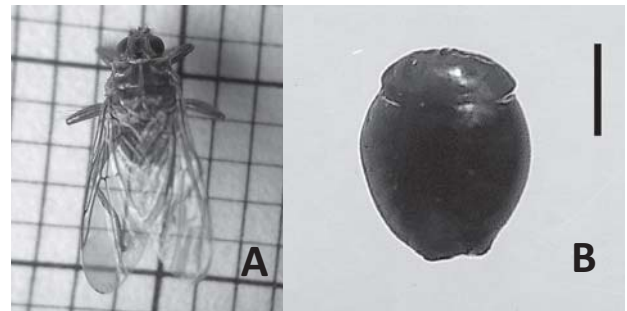


図1 A, キタトリシラミバエ *Ornithomya fringillina* の雌成虫; B, キタトリシラミバエの蛹。目盛りは1 mm。

個体を生かしたまま小瓶内に入れていたところ, 終齢幼虫が生み落とされていた。終齢幼虫はただちに蛹化した(図1B)。

終齢幼虫を産み落とした雌成虫を乾燥標本とし, 実体顕微鏡下で観察した。その結果, 本個体は, Maa (1967) の検索表によりキタトリシラミバエと同定された。

## 2) 蛹の飼育

この蛹は, 11月25日に(株)シー・アイ・シー研究開発部(東京都台東区浅草)へ届き, そこで飼育された。

2 cm角に切ったオアシス(株)大創産業, 材質: フェノール樹脂)に窪みを作り, その上に蛹を置いた。このオアシスを直径約5 cmのシャーレに入れ,

\* Corresponding author: cymothoid@yahoo.co.jp  
 受付: 2015年8月28日 (Received: 28 August, 2015)  
 受理: 2015年10月27日 (Accepted: 27 October, 2015)



図2 飼育容器

同時に内部の加湿用にオアシス切れ端（約1×1.5 cm）も設置した（図2）。シャーレの保管場所はパソコンキーボード横で、この部屋の室温は、昼には暖房を入れるため26°C程度、夜には暖房無しの室温であった。この部屋には自然光がよく入り、点灯は7:00頃で消灯は20:00頃であった。

給水の間隔は月に1回程度であった。給水は加湿用オアシス切れ端に対して行い、蛹を置いたオアシスに水を直接与えることはなかった。

2011年4月20日、飼育していた蛹から成虫が羽化した。これは、母虫による終齢幼虫の産出から171日目である。羽化後に水分などは与えなかった。この成虫は、同年4月22日に死亡した。

死亡した個体は、実体顕微鏡下で、Maa（1967）の検索表によりキタトリシラミバエの雌であると同定された。なお、本報告で用いた標本は、兵庫県立人と自然の博物館に保管されている。

## 考 察

キタトリシラミバエは、北海道、利尻島、本州（福井県）、朝鮮半島、旧北区で記録されていた（茂木, 2014）。飼育したキタトリシラミバエは新潟県で採集された個体であるため、本報告はMogi et al.（2002）に次いで本種の本州2例目の記録となる。

キタトリシラミバエの飼育例としては、イギリス

の北東部に位置するフェア島で実施されたCorbet（1956）が知られている。Corbet（1956）は、1954年夏に採集した本種の蛹62個体を、脱脂綿で栓をしたガラス管に入れ、暖房を使用しない小屋の中の暗い箱の中に入れ、多くを羽化させることに成功した。一方、本報告では、キタトリシラミバエの蛹をオアシスを用いた方法で羽化させることが可能であることが確認された。

## 謝 辞

本研究の一部は厚生労働科学研究費補助金 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業（H24-新興-一般-007）の助成を受けて行なわれた。

## 引用文献

- 1) Corbet, G. B. (1956) The life-history and host-relations of a hippoboscid fly *Ornithomyia fringillina* Curtis. *Journal of Animal Ecology* 25: 403–420.
- 2) Hill, D. S. (1963) The life history of the British species of *Ornithomya* (Diptera: Hippoboscidae). *Transactions of the Royal Entomological Society of London* 115: 391–407.
- 3) 片岡宣彦 (1999) 京都府下で採集されたセルリシラミバエ（新称）とその羽化. はなあぶ (8): 7–9.
- 4) Maa, T. C. (1967) A synopsis of Diptera Pupipara of Japan. *Pacific Insects* 9: 727–760.
- 5) 茂木幹義 (2014) シラミバエ科, 日本昆虫目録編集委員会編, 日本昆虫目録第8巻第2部, 743–747, 権歌書房, 福岡.
- 6) Mogi, M., Mano, T. and Sawada, I. (2002) Records of Hippoboscidae, Nycteribiidae and Streblidae (Diptera) from Japan. *Medical Entomology and Zoology* 53 (Suppl. 2): 141–165.